

「イスラエル建国史」

33 英委任統治下のパレスチナ 10

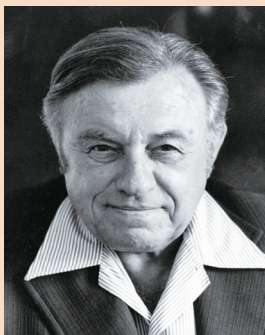
『つのぶえ』紙に掲載された「イスラエル建国史」の過去記事は、ハーベストタイムのウェブサイト (<http://www.harvesttime.tv/news-topics/history-of-israel/>) で公開しています。

合同救出委員会の発足

ヒトラーの権力掌握と共に始まったホロコーストは、戦争によって拡大、深化し、未曾有の悲劇をユダヤ民族にもたらした。

ヨーロッパにおけるナチドイツ軍の急速な侵攻、占領で、ユダヤ人はたちまち逃げ場を失い、数少ない脱出ルートもやがて封鎖されて、袋小路のなかで 100 万の子供を含む 600 万人が虐殺された。

救出にあたるパレスチナのユダヤ人社会は、当初組織毎に中立国トルコに拠点を置いて、ばらばらに活動していたが、救出活動は 1942 年 12 月に統一された。ユダヤ機関が中心になり、合同救出委員会 (Va' ad ha-Hatsla be-Kushta) がイスタンブールに設立されたのである。シオニスト主流派、NZO (修正派)、超正統派のアグダット・イスラエル、そして各キブツ運動が大団結して、救出にあたった。救出には情報蒐集が大切で、エルサレムのユダヤ機関政治局から T・コレック (1911 ~ 2007 年、後のエルサレム市長) と E・アブリエル (1917 ~ 1980 年、後の駐イタリア大使) がイスタンブールに出向し、ヨーロッパのユダヤ人地下抵抗組織、そして英米の情報機関と協力して、情報活動をおこなった。



T・コレック

主な救出ルートは 3 つあった。第 1 はパレスチナに最も近いバルカン半島経由である。ここに拠点を設けたのはそのためである。

前号で紹介した表 (パレスチナへの合法非合法移民) は、主にこのルートによる脱出で、合法は陸上、非合法は海上ルートが中心であった。

ポーランドーロシアーテヘラン経由

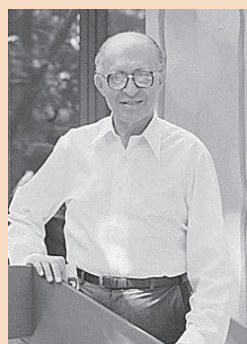
独ソのポーランド侵攻後、同国はドイツとソ連に分割され、約 30 万のユダヤ人がソ連圏に残った。間もなくして独ソ戦が始まり、このユダヤ人達は、中央アジアやシベリアの収容所へ送られ、或いは流浪の生活を送ることになった。

1941 年夏、ポーランド亡命政府とソ連政府が協定を結び、ポーランド国籍者は自由ポーランド軍 (アンデルス部隊) に入隊できることになった。志願者はウラル山脈の西方を南下し、カスピ海東岸から船でイラン側のバンダルアザリに渡る。彼等が目指すのは、英中東軍の本拠地パレスチナであった。そこで訓練をうけるのであるが、難所のザグロス大山脈 (全長 1,500 キロ) を越えてイラクへ至り、更にそこからトランスヨルダンへ向かわなければならなかった。

【これまでの流れ】

ユダヤ人のパレスチナの地への移民は、イスラエル建国のはるか以前から綿々と続いてきた営みであった。しかし、その流れを急速に加速させたのが、ナチスドイツの勃興である。ナチスがヨーロッパを席卷し、征服した先々でユダヤ人を強制収容所に送り、虐殺していく中で、ヨーロッパを脱出しようとする大量のユダヤ人難民が発生した。一方、多くの国がユダヤ人難民の受け入れを拒否していたため、彼らの唯一の希望はパレスチナの地であった。だが、パレスチナを委任統治するイギリスは、アラブ人社会に配慮してユダヤ人の移民を制限したため、ユダヤ人のヨーロッパ脱出は困難を極めた。その中で、パレスチナのユダヤ人社会はユダヤ難民救済のために奔走する。

志願者 2 万 4,000 人がパレスチナを目指し、1942 年 4 月から 8 月にかけて、現地に着した。そのひとりが、M・ベギン (1913 ~ 1992 年、後に



M・ベギン

首相) である。占領下ポーランドでソ連官憲に逮捕されたベギンは、反ソ活動 (シオニスト運動はそれに該当するとされた) の嫌で強制労働 8 年の判決をうけ、極北の地でペチョーラ川をくだっている時、ポーランド国籍者の解放ニュースをうけとった。入隊を志願したベギンは、5 月初旬にパレスチナへ到着し、多くの志願兵と同じように、現地除隊の形で軍を離れた。

実はこの 2 万 4,000 人のなかに、孤児や片親を亡くした子供約 1,000 人とその世話をする大人 800 人が含まれていた。彼等にザグロス大山脈は越えられない。テヘランでユダヤ機関の世話をうけながら、移住許可の来るのを待った。その許可が来たのは 1943 年 1 月であった。



©Wiki66

ザグロス山脈

戦争中で船の調達は容易ではなかった。一行は一旦カラチまで船で行き、更にそこからスエズ運河を目指した。北シナイ沿岸の鉄道でハイファの南にあるアトリットの収容所に到着したのは、1943年2月18日。10ヶ月を要する長旅で、ポーランド侵攻から算えれば3年半の流浪の果てに、約束の地へ生きて到達したのである。その数は、子供861名、大人369名であった。

ポーランドーシベリア鉄道ー日本経由

ポーランドからリトアニアへ逃げた人もいる。約1万5,000人であるが、そのうち5,000人ほどが脱出に成功し、大半がシベリア経由で日本へたどり着いた。通過ビザを発給した日本の杉原千畝領事代理のおかげである。杉原氏が任地のカウナスを離れ、更に独ソ戦も始まったので、リトアニアからソ連経由（シベリア鉄道）で日本へ脱出するルートは、使えなくなった。ヤドバシエム（国立ホロコースト祈念館）の調べによ



杉原千畝

ると、3,489名が助かった。その内約500名は、ミル、ランバン等の伝統あるエシバ（ユダヤ教神学校）のラビと学生である。

フランスーポルトガル経由とジョイントの活動

第3の脱出ルートがポルトガルであった。それにはジョイント*¹が深く関与した。パリにあったジョイントのヨーロッパ総局はフランスの敗北に伴ない、活動拠点を中立国ポルトガルのリスボンに移した。そこで救出の指揮をとったのが、ラビの資格を持つジョセフ・J・シュワルツ（1899～1975年）である。ニューヨークのユダヤ人社会で福祉関係の仕事をしてしたが、救出で才能を発揮し、ミスター・ジョイント、と言われるようになった。

フランスやオランダから逃げてくるユダ

ヤ人難民を収容し、ビザのとれる北米や南米へ送りだし、或いは難民をかくまい（子供7,000名を秘密施設に収容した）、中央アジアで飢餓状態にあるポーランド系ユダヤ人難民に対しては、保存用食品のパッケージを、テヘラン経由で送った。勿論、イスタンブールの合同救出委員会の活動にも関与している。

ジョイントの活動資金は、北米ユダヤ人社会における献金をベースとしており、スイスに居住し、シュワルツの指揮下で行動するサリー・メイヤー（1882～1950年）の許に送金された。そこからリスボンへ送られるのである。メイヤーは、ヨーロッパ各地のユダヤ人抵抗組織から送られてくる情報を集める役割も果たした。次の表は、ジョイントの活動予算（単位万ドル）である。大半は難民救出のために支出された。難民にすぐビザを発給する国はない。身寄りどころか職も金もない難民は厄介者にすぎないのである。ジョイントが移住国における難民の生活を保証しなければならぬが普通であった。上海の虹口地区にあるゲトーには、戦前に船で来た人を含め1万5000人ほどの難民がいたが、生活費を保証するのもジョイントの仕事であった。

【ジョイントの予算】

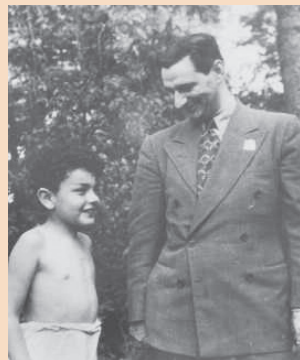
単位：ドル

1940～1941年	11,900,000
1942年	6,000,000
1943年	8,900,000
1944年	14,800,000
1945年	26,800,000

【出典】E・パウアー「ジョイント」

義の人

しかし、フランスやオランダからポルトガルへ逃げてくる難民は、スペインを通過しなければならない。スペイン当局は、



救出されたユダヤ人少年と語るジョセフ・J・シュワルツ

ポルトガルの入国ビザがなければ、通過を認めないとの立場であった。そのポルトガルは、1940年5月10日付で、難民に対するビザ発給を禁止し、各地の

領事部にその旨通達した。ボルドーのポルトガル領事館には多数の難民が押しかけた。その窮状に心を動かされ、ビザ発給を決意したのが、ソウサ・メンデス領事（1885～1954年）である。領事は、1,575通のビザを発給し、1万近い難民の命を救った。メンデスの行為がなければ、シュワルツの活動もなかったわけである。

しかしメンデス領事は本国に召還され、年金等が一切つかない解職処分を受けた。メンデスは13人の子供を抱え、貧困に苦しみ失意のうちに死亡した。

メンデスは敬虔なカトリック教徒で、「ひとりのカトリック（ヒトラー）のため万人が苦しむのなら、万人のためにひとりのカトリックが苦しむのは許される」、「神に抗する人間につくよりは、人に抗する神の側につく」と言った。心に沁みる言葉である。職や身命を賭してユダヤ人難民を救った人々は、「義の人」としてヤドバシエムに顕彰された。



ソウサ・メンデス

2012年1月1日現在で2万3,788人。その行為は暗黒の時代に燦然として輝く。

ホロコーストでヨーロッパのユダヤ人社会は壊滅し、建国運動は停頓したかに見えた。しかし、パレスチナのユダヤ人社会では、運動を推進する重大な動きが始まっていた。【次回へつづく】

*¹ ジョイント：アメリカ・ユダヤ人共同配給委員会。

1937年長崎県生まれ。

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人

早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。

現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

